

原著論文

# 審判員の判定に関する心理学的考察 — 大学生サッカー選手を対象とした審判員の判定に関する印象調査 —

齊藤 茂・内田 若希

## Psychological Study of Referees' Judgement — Investigation of the Impression of Referees' Judgement for University Soccer Players —

SAITO Shigeru and UCHIDA Wakaki

### 要 旨

本研究では、大学生サッカー選手が審判員の判定に対してもっている印象について、以下の仮説検証を目的とした統計的分析及び考察を行った。主な仮説は、勝利チームは判定を有利もしくは公平であったと感じている、敗戦チームは判定と試合結果との因果関係を感じやすく、また判定が気になっている、及び誤審の有無の程度がその試合全体の判定に関する印象に影響を及ぼす、であった。

結果として、1. 勝利チームは敗戦チームに比して、審判員の判定を不利だと感じている者が多く、また、判定を「公平」だと感じている者の割合に試合の勝敗による有意な差はない、2. 勝利チームは敗戦チームに比して、審判員の判定が気になっている、3. 勝利チームと敗戦チーム間には、審判員の判定と試合結果との因果関係の感じ方について有意な差がない、4. 審判員による誤審は、その試合全体の判定に関する印象に影響を及ぼす、等が明らかとなった。

### キーワード

審判員 判定 大学生サッカー選手 印象調査

### 目 次

- I. 序論
- II. 方法
- III. 結果
- IV. 考察
- V. 結語
- 付記
- 注
- 文献

## 1. 序論

どのようなスポーツ競技にも、独自に定められた競技規則、いわゆる“ルール”というものがある。そして、競技に参加する選手たちがその“ルールという枠”を遵守することにより、スポーツは競技として成り立っている。その枠を選手とともに守り、「判断基準」<sup>1)</sup>となり、実際に試合をコントロールする役割を果たす人が審判員（レフェリーやアンパイア等、「競技によって名称は異なる」<sup>2)</sup>が、本研究では審判員と記載する）である。現代のスポーツ競技においては、審判員がいなければ試合は成立しない、というほどに重要な存在と言えよう。さらに審判員は、試合の「演出家」<sup>3)</sup>としての役割まで期待されており、「観衆が興奮させられるようなゲームにするのも、つまらないゲームにするのもレフェリーによる」<sup>3)</sup>とさえ言われている。

しかし、審判員も人間であるが故に、彼らの判定における誤りを「ゼロにすることは不可能」<sup>2)</sup>であろう。サッカー国際審判員である上川徹氏が述べているように、「死角をなくしすべてを正しく判断を下すことは難しく、ミスが避けられないのが現状」<sup>4)</sup>と言える。それ故、度々いわゆる“誤審”が起こっており、時にはそれによって試合の結果が左右されることがあるのも事実であり、「大騒動にまで発展するというようなケース」<sup>2)</sup>も生じている。例えば、近年では2014年に、全国高校サッカー選手権大会の試合において誤審が相次いだとし、関係者が日本スポーツ仲裁機構に調停申し立てを行った事例も発生している。米大リーグ（MLB）、ナショナル・リーグのコールマン会長（当時）が「野球のすばらしさの一面は、その不完全さにある。時として審判は誤った判定をすることがあるが、それも野球というゲームの一部である」<sup>5)</sup>と述べているように、スポーツ競技における誤審について寛容な立場からの意見も一部には見られるが、競技の現場においては大抵の場合、“正確な判定”が望まれていると言えらる。

こうした問題を解決するための一方策として、様々な競技において、ビデオカメラやコンピューターによるテクノロジーを用いた判定が行われるようになってきており、スポーツ競技から誤審をなくす動きが活発化してきている。2016年にブラジルで開催されたリオデジャネイロ五輪においても、バレーボール、テニス、バドミントン、柔道、フェンシング等、多くの種目においてビデオ判定が用いられて

いる場面が幾度となく見受けられた。こうした技術の導入やさらなる発展は“問題を解決するための一方策”となるだろうが、その一方で、審判員にとっては新たなプレッシャーともなりかねないと考えられる。

ここまで述べてきたように、各種競技スポーツにおいて、審判員の判定に関連する多くの問題が取りざたされるようになってきており、審判員を取り巻く現代の状況は、まさに「審判受難の時代」<sup>1)</sup>であると言えよう。もっとも、上述したような様々なテクノロジーが取り入れられる時代が到来する以前から、審判員は「上手くできて当たり前」で、「それ（審判）なしでは済まされないが、具合が悪いとはじめてその存在に気づく」、「失敗した時にだけ印象に残るのが審判」<sup>6)</sup>などと言われるような辛い立場に置かれてきた。そして、審判員は「1つでもミスを行えば選手、指導者、観客などの非難的」となりかねないことから、裏方的な仕事でありながらも「選手、サポーター、メディア、アセッサー（レフェリングの評価者）などからの多様なプレッシャーやストレスがある」<sup>4)</sup>ことが想像できる。こうした状況は、例えば、シンクロナイズドスイミングの審判員（ジャッジと呼ばれる）を対象とした研究において、「耐ストレス性の高いこと」<sup>7)</sup>が彼らに必要な条件であるとされていることにも表れていると言えよう。そして最近では、多くの審判員が（ストレスやプレッシャーに対する）「その対処法を学びたい」<sup>4)</sup>と望んでいると言われ、ストレス対処法等を身につけることを目的とした、サッカーの審判員を対象としたメンタルトレーニングの実践が開始されたという報告<sup>注1</sup>もある<sup>4, 8)</sup>。

こうした審判員の置かれた立場や状況について心理学的に明らかとするための第一段階として、本研究では、審判員から“ジャッジされる側”である選手を対象とした調査を行うことにした。ジャッジされる側の選手を対象とした研究から始める理由としては、彼らが審判員の判定に対して感じている印象や評価等を明らかにすることにより、上述のような審判員にかかる「多様なプレッシャーやストレス」<sup>4)</sup>の詳細が、より具体的にイメージしやすくなると思ったからである。

近年では、スポーツ競技における審判員の役割は一層重要視されてきている一方で、審判員を対象とした学術的な研究は非常に数少なく、伊藤ら<sup>9)</sup>によれば、その大半は審判員の試合中の動きの分析を行ったものであるという（例えば、高野<sup>10)</sup>；前

田<sup>3)</sup>等)。また、スポーツ心理学領域における学術的な研究はさらに数が少なく、例えば、見正によるY-G性格検査を用いてバレーボールの審判員の性格傾向を検討した調査<sup>11)</sup>、上野らによるバレーボールの審判員の心理的緊張度について心拍数をもとに検討を行った調査<sup>12)</sup>、伊藤らによる少年サッカー審判員を対象としたその判定に関する意識調査<sup>9)</sup>及び村上らによるトップレフェリーに必要な心理特性に関するインタビュー調査<sup>13)</sup>等が散見される程度である。そして、本研究が注目しているような、選手側、つまり「ジャッジされる側の視点」から審判員の具体的な判定について取り上げた研究は、国内(例えば、林ら<sup>14)</sup>；小林ら<sup>15)</sup>；榎本・荒井<sup>16)</sup>等)・国外(例えば、Taylor<sup>17)</sup>等)ともに、それぞれ何篇かが確認できる程度であり、また国内における文献は非常に古いものが多い。

上述のような背景のもと、本研究では大学生サッカー選手を対象とし、彼らもっている審判員の判定に関する印象について、試合の結果(勝利・敗戦)及び審判員の誤審の有無の程度(かなりあった・いくつかあった・全くなかった)による比較を行い、以下の仮説について検証することを目的とした統計的分析を行った。

本研究の仮説は、①勝利チームは敗戦チームに比して、審判員の判定を有利もしくは公平だと感じている、②敗戦チームは勝利チームに比して、審判員の判定と試合結果との因果関係(審判員の判定が試合結果に影響を及ぼす)を感じやすい、③敗戦チームは勝利チームに比して、試合中に審判員の判定が気になっている、④審判員による誤審の有無が、その試合全体の判定に関する印象(有利・不利、試合結果との因果関係及び気になる程度)に影響を及ぼす、であった。

## II. 方法

### 1. 対象者

本研究の対象者は、A地域の大学サッカー1部リーグ8試合及び2部リーグ3試合、計11試合においてベンチ入り登録された選手327名とした。対象者は全て男性であり、1試合あたりの各チームにおけるベンチ入り選手の人数は、大会規定により最大18名であった。

なお、本研究の対象となった11試合はいずれもA地域の大学サッカーリーグにおける公式戦として開催された試合であった。全ての試合における主

審は、各種サッカー協会が認めるサッカー公認審判員の2級以上<sup>注2)</sup>の所持者が担当すると定められており、A地域に属する各県サッカー協会の審判委員会より派遣される一定レベル以上の技量を有する審判員である。

### 2. 調査の方法、及び実施の手続き

調査に先立ち、筆者本人がチームの責任者(部長もしくは監督等)に調査の趣旨を説明し、了解を得た上で実施した。調査は試合終了直後、各チームの選手に対しても同様に調査の趣旨や内容について説明を行い、質問紙を配布した。その際、調査への協力は対象者の自由意志によること、得られた情報は今回の調査目的以外では使用しないことなども併せて説明された。回収後、提出された質問紙の確認を行い、全ての設問に対して回答していない対象者の質問紙については本研究の対象から除外した。

質問紙調査の具体的な質問項目は、①審判の判定は自分たちのチームにとってどう(有利、公平、不利)であったか、なぜそう感じたのか(理由)、②審判の判定は試合結果にどの程度影響を与えたか(5大きく与えた-1全く与えなかった、の5件法)、なぜそう感じたのか(理由)、③試合中、審判の判定はどの程度気になったか(5かなりなった-1全くなかった、の5件法)、なぜそう感じたのか(理由)、④試合の中で、明らかに誤っていると感じた判定はあったか(かなりあった、いくつかあった(1-2回以内)、全くなかった)、「あった」と答えた人は具体的に教えてください(いつ、場面、内容等)、であった。加えて、質問紙の最後に、審判の判定について試合の中で感じたことや日頃から考えていることを記載してもらうための自由記述欄を付した。なお、自由記述欄に記載された個人名や団体名等については、匿名化及び一部削除等の改変を行い、研究対象者が特定できないように配慮した。

### 3. 統計処理

上述した質問項目について、まずは勝利チーム・敗戦チーム別に集計を行い、2群による比較を行った。「審判員の判定は自チームにとって有利であったと感じた程度」及び「明らかに誤っていると感じた審判員の判定の有無」についてはカイ二乗検定、「審判員の判定が試合結果に与えた影響の程度」及び「試合中に審判員の判定が気になった程度」についてはt検定を実施した。



次に、「審判員の誤審の有無と各質問項目との関係」については、審判員の誤審の有無の程度(かなりあった・いくつもあった・全くなかった)による比較・検討を行った。「誤審の有無と判定の有利・不利との関係」についてはカイ二乗検定、「誤審の有無と判定が試合結果に与えた影響の程度との関係」及び「誤審の有無と判定が気になった程度との関係」については一元配置分散分析を用いた。

データ解析には統計ソフト(IBM SPSS Statistics 20:日本IBM社)を使用した。

### Ⅲ. 結果

#### 1. 勝利チームと敗戦チームの比較

##### 1) 審判員の判定の有利・不利

「審判員の判定は自チームにとって有利であったと感じた程度」についてカイ二乗検定を行った結果、勝利チームと敗戦チームの間に有意な差が認められた( $\chi^2=43.69, df=2, p=.00 <.01$ )。

続いて、残差分析の結果、敗戦チームに「有利」だと感じた者が有意に多く(調整残差=5.9)、勝利チームには有意に少ない(調整残差=-5.9)こと、また逆に、勝利チームに「不利」だと感じた者が有意に多く(調整残差=4.0)、敗戦チームには有意に少ない(調整残差=-4.0)ことが明らかとなった(表1)。試合の勝敗によって上述のような差があった一方で、審判員の判定を「公平」だと感じている対象者の割合に有意な差は認められなかった。

また、全体として、2/3程度の対象者(66.4%)が審判の判定を「公平」であったと感じていたことが分かった。

なお、「審判員の判定の有利・不利」と感じた理由に関する主な自由記述を、回答(有利、公平、不利)及びチームの勝敗ごとにまとめ、表2に示した。

##### 2) 審判員の判定が試合結果に与えた影響の程度

「審判員の判定が試合結果に与えた影響の程度」についてt検定を行った結果、 $t(325)=-.23, p=.82 >.05$ となり、勝利チームと敗戦チームの間に有意な差は認められなかった(表3)。

また、全体として、対象者は審判員の判定が試合結果に大きな影響を与えているとは考えていない傾向があることがみてとれる(Ave=3.06)。

なお、「審判員の判定が試合結果に与えた」と感じた理由に関する主な自由記述を、回答(全くない・かなりある)及びチームの勝敗ごとにまとめ、表4に示した。

##### 3) 審判員の判定が気になった程度

「試合中に審判員の判定が気になった程度」についてt検定を行った結果、 $t(325)=3.74, p=.00 <.01$ となり、勝利チームと敗戦チームの間に有意な差が認められた。この検定結果から、勝利チームは敗戦チームに比して試合中に審判員の判定が気になっているということが明らかとなった(表5)。

また、「審判員の判定が試合結果に与えた」と感じた理由についての主な自由記述を、回答(全くなかった・かなりあった)及びチームの勝敗ごとにまとめ、表6に示した。

##### 4) 審判員の誤審の有無

「明らかに誤っていると感じた審判員の判定の

表1 審判員の判定の有利・不利

			審判の判定			合計
			有利	公平	不利	
勝敗	勝利チーム	度数(%)	1 (0.6%)	112 (67.1%)	54 (32.3%)	167
		期待度数	17.4	110.8	38.8	167.0
		調整済み残差	-5.9**	.3	4.0**	
	敗戦チーム	度数(%)	33 (20.6%)	105 (65.6%)	22 (13.8%)	160
		期待度数	16.6	106.2	37.2	160.0
		調整済み残差	5.9**	-.3	-4.0**	
合計	度数(%)	34 (19.4%)	217 (66.4%)	76 (23.2%)	327	
	期待度数	34.0	217.0	76.0	327.0	

\*\* $p < .01$

有無」についてカイ二乗検定を行った結果、勝利チームと敗戦チームの間に有意な差が認められた ( $\chi^2=23.46, df=2, p=.00 <.01$ )。

続いて、残差分析の結果、勝利チームに「かなりあった」と感じた者が有意に多く(調整残差=4.5)、敗戦チームには有意に少ない(調整残差=-4.5)こと、また、逆に敗戦チームには「全くない」と感じた者が有意に多く(調整残差=2.9)、勝利チームには有意に少ない(調整残差=-2.9)ことが明らかとなった(表7)。

また、勝敗によって上述のような差があった一方で、全体としては「全くなかった」(35.8%)及び「いくつか(1-2回以内)」(54.1%)と感じている対象者が89.9%で、ほぼ9割であることが分かった。

## 2. 審判員の誤審の有無と各質問項目との関係

### 1) 誤審の有無と「審判員の判定の有利・不利」との関係

「明らかに誤っていると感じた審判員の判定の有無(誤審の有無)」が「審判員の判定が自チームにとって有利であったと感じた程度」に与える影響についてカイ二乗検定を行った結果、有意な差が認められた ( $\chi^2=59.19, df=4, p=.00 <.01$ )。

続いて残差分析の結果、誤審がかなりあったと回答した対象者に「公平であった」と答えた者が有意に少なく(調整残差=-4.6)、「不利であった」と答えた者が有意に多い(調整残差=6.2)ことが明らかとなった。また、誤審が全くなかったと回答し

表2 審判員の判定の有利・不利に関する主な自由記述

回答	勝敗	主な記述
有利	勝利	・ファウルなどをよく取ってくれた
	敗戦	・ファウルの基準がこちらの方が甘かった/よくファウルをとってくれていた ・味方に対するグレーゾーンのファウルも取ってくれた ・自チームのファウルをいくつか流してくれた
公平	勝利	・公平だったと思う/しっかりファウルの所はとっていたから/よく見ていたと思う/ファウルの基準がしっかり決まっていた ・気になった点はあるが、不公平ではなかった/相手も自分たちと同じ感じだから ・なんで?と思う判定がどちらにもあったから/お互いに疑問が残る判定をしていたから/両チーム共に不満の残る判定があったので/両チームに不可解な判定が多かった ・スムーズな試合展開だったから ・いい試合だったので
	敗戦	・公平だった/判定ミスかなと思う場面がなかった ・お互いのファウルをしっかり見ていた ・勝敗に関わるジャッジがなかったから ・お互い様だったと思う/お互いにスローインの判定に誤りがあったため
不利	勝利	・威圧的だった ・アウェーの感じがあった。おどされた ・ただファウルで終わることが多かった/カードが出てもいいファウルが何回もあったのに出さなかった/イエローを出さないからアフターが止まらなかった ・ファウルの基準がおかしかったと思う/明らかな誤審が多い
	敗戦	・ファウルの基準/ファウルの判定 ・判定に疑問があるところはいくつかあった ・カードの理由不明

表3 審判員の判定が試合結果に与えた影響

勝敗	N	平均	標準偏差	t
勝利チーム	167	3.05	1.07	-.23
敗戦チーム	160	3.08	1.03	

た対象者には、「有利であった」（調整残差=2.2）及び「公平であった」（調整残差=3.7）と答えた者が有意に多く、「不利であった」と答えた者が有意に少ない（調整残差=-5.8）ことが明らかとなった（表8）。

## 2) 誤審の有無と「審判員の判定が試合結果に与えた影響の程度」との関係

「明らかに誤っていると感じた審判員の判定の有無（誤審の有無）」が「審判員の判定が試合結果に与えた影響の程度」に与える影響について分散分析を行った結果、 $F(2,324) = 12.73, p = .00 <$

表4 審判員の判定が試合結果に与えた影響に関する主な自由記述

回答	勝敗	主な記述
全くない	勝利	<ul style="list-style-type: none"> <li>・正しいジャッジだったから/公平だった</li> <li>・直接結果に影響を与えてはない</li> <li>・結果2-0で勝ったから</li> <li>・力の差がありすぎた</li> </ul>
	敗戦	<ul style="list-style-type: none"> <li>・結局6点差で負けたから</li> <li>・公平なジャッジだと思った</li> </ul>
あまりない	勝利	<ul style="list-style-type: none"> <li>・得点に関与するプレーで微妙なのはなかった</li> <li>・誤審の場面では結果がほぼ決定的な状況であった</li> <li>・警告など今後の試合に影響が出てくると思う</li> </ul>
	敗戦	<ul style="list-style-type: none"> <li>・妥当に感じた</li> <li>・実力の差があった</li> <li>・審判の判定は関係なく力の差があった</li> </ul>
どちらともいえない	勝利	<ul style="list-style-type: none"> <li>・平等なジャッジが多かった/冷静な試合コントロールだった</li> <li>・試合内容をあまり左右するものじゃなかった</li> <li>・力の差があり審判はあまり影響がない/点差のついた試合だった</li> <li>・そういうことには気にしたことがない</li> </ul>
	敗戦	<ul style="list-style-type: none"> <li>・結果には関係ない</li> <li>・実力差があった</li> <li>・両チームの判定に曖昧な場面があった/スローインの間違えがお互いにあった</li> </ul>
ややある	勝利	<ul style="list-style-type: none"> <li>・コーナーがゴールキックに、スローインも逆/ PKのシーンは少し疑問であった</li> <li>・雰囲気壊した・基準が分からない</li> <li>・順位を決める時に得失点差で変動がある</li> </ul>
	敗戦	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ファウルの基準が納得できなかったため/正しい判定ができていなかった</li> <li>・PKは試合に影響を与えたと思った</li> <li>・正しいジャッジではあったがPKの判定があった</li> </ul>
かなりある	勝利	<ul style="list-style-type: none"> <li>・試合づくりが下手/審判のせいで試合が荒れたし、失点した</li> <li>・1個のジャッジミスでピンチになった</li> <li>・失点0にこだわってやっているのにオフサイドで失点してしまった</li> </ul>
	敗戦	<ul style="list-style-type: none"> <li>・失点のシーンでハンドの判定がなかった</li> <li>・負けたから</li> </ul>

表5 審判員の判定が気になった程度

勝敗	N	平均	標準偏差	t
勝利チーム	167	3.40	1.09	3.74**
敗戦チーム	160	2.98	.94	

\*\* $p < .01$

.01となり誤審の有無の主効果が認められた(表9)。  
 続いて、HSD法による多重比較の結果、誤審について「かなりあった」及び「いくつか(1-2回以内)」の平均値は、「全くなかった」の平均値と比較して有意に高いことが認められた(p=.00<.01)。つ

まり、誤審が「全くなかった」と回答した群は、誤審がなかったことで「審判員の判定が試合結果に与えた影響の程度」も相対的に少ないと捉えている、ということが言える。

表6 審判員の判定が気になった程度に関する主な自由記述

回答	勝敗	主な記述
全くなかった	勝利	<ul style="list-style-type: none"> <li>・正しいジャッジだった/正当な判断だったと思う</li> <li>・うまかった/いいポジションをとっていた</li> <li>・気にならなかった</li> </ul>
	敗戦	<ul style="list-style-type: none"> <li>・スムーズでした/落ち着いていたと思う</li> <li>・気になるような誤審がなかった</li> </ul>
あまりなかった	勝利	<ul style="list-style-type: none"> <li>・しっかり見ていてくれていた</li> <li>・試合に集中していた</li> </ul>
	敗戦	<ul style="list-style-type: none"> <li>・気にならなかったため</li> <li>・自分のプレーに集中していた</li> <li>・こちらに不利なものがあまりなかった</li> </ul>
どちらともいえない	勝利	<ul style="list-style-type: none"> <li>・公平だったから</li> <li>・公平に間違ったジャッジが多かった</li> <li>・いつもと変わらないから</li> </ul>
	敗戦	<ul style="list-style-type: none"> <li>・特に気にならなかった。公平だった</li> <li>・両チームに不利なものがあつた</li> <li>・ジャッジは正当。注意などの時に、ややプレーヤーに対して上から目線だった</li> </ul>
ややなつた	勝利	<ul style="list-style-type: none"> <li>・基準がわからない/どこまでタックルしていいのか基準が分からない</li> <li>・危ないプレーに対して厳しく言ってほしい/注意、警告がないのでファウルが多かった/イエロー出すのが遅い/もう少しカードを出さないと荒れると思う/危ないプレーがあつたのに判定が軽かつた</li> <li>・口調、態度/笑顔がなく終始怒っている感じがした/ピリピリしていたから</li> <li>・もっと自分の判断に自信を持って/自分のジャッジに自信を持ってほしい</li> <li>・球際でもっと激しくやっていたのでは?すぐ笛を吹き過ぎだと思つた/激しいチャージ=ファウルではないと感じた</li> <li>・少し相手寄りのような気がした</li> </ul>
	敗戦	<ul style="list-style-type: none"> <li>・判定が一定ではなかつたと思つた/理解できないジャッジがあつた</li> <li>・笛を吹くタイミングが少し遅かつた/判定が遅く感じた</li> <li>・怒っていた</li> </ul>
かなりなつた	勝利	<ul style="list-style-type: none"> <li>・基準が曖昧だった/基準が分からない/ファウルの基準がおかしい</li> <li>・実際にやっている選手とのズレ</li> <li>・喧嘩をうってきて、選手につかかってくるイラツとした</li> <li>・同じ人が何回もファウルしているのにイエローを出さなかつたから</li> <li>・主審と副審の連携不足を感じた。実際にそれが原因で誤審が生まれている</li> <li>・失点のシーン、副審旗上げているのに下げる。間に合つてない</li> <li>・全くコントロールできていない</li> </ul>
	敗戦	<ul style="list-style-type: none"> <li>・それファウルなの?みたいなのが多かつた</li> <li>・プレーオンにできる場面が多かつた</li> </ul>

表7 審判員の誤審の有無

			明らかに誤っていると感じた判定			合計
			かなりあった	いくつか (1-2)	全くなかった	
勝敗	勝利チーム	度数 (%)	29 (17.4%)	91 (54.5%)	47 (28.1%)	167
		期待度数	16.9	90.4	59.8	167.0
		調整済み残差	4.5**	.1	-2.9**	
	敗戦チーム	度数 (%)	4 (2.5%)	86 (53.8%)	70 (43.8%)	160
		期待度数	16.1	86.6	57.2	160.0
		調整済み残差	-4.5**	-.1	2.9**	
合計	度数 (%)	33 (10.1%)	177 (54.1%)	117 (35.8%)	327	
	期待度数	33.0	177.0	117.0	327.0	

\*\*p<.01

表8 誤審の有無と審判員の判定の有利・不利との関係

			明らかに誤っていると感じた判定			合計
			有利	公平	不利	
誤審の有無	かなりあった	度数 (%)	1 (3.0%)	10 (30.3%)	22 (66.7%)	33
		期待度数	3.4	21.9	7.7	33.0
		調整済み残差	-1.5	-4.6**	6.2**	
	いくつか	度数 (%)	15 (8.5%)	114 (64.4%)	48 (27.1%)	177
		期待度数	18.4	117.5	41.1	177.0
		調整済み残差	-1.2	-.8	1.8	
	全くなかった	度数 (%)	18 (15.4%)	93 (79.5%)	6 (5.1%)	117
		期待度数	12.2	77.6	27.2	117.0
		調整済み残差	2.2*	3.7**	-5.8**	
合計	度数 (%)	34 (10.4%)	217 (66.4%)	76 (23.2%)	327	
	期待度数	34.0	217.0	76.0	327.0	

\*\*p<.01 \*<.05

表9 誤審の有無と審判員の判定が試合結果に与えた影響の程度との関係

誤審の有無	N	平均	標準偏差	F
かなりあった	33	3.52	1.25	12.73**
いくつか	177	3.21	.99	
全くなかった	117	2.70	.97	
合計	327	3.06	1.05	

\*\*p<.01

表10 誤審の有無と審判員の判定が気になった程度との関係

誤審の有無	N	平均	標準偏差	F
かなりあった	33	4.33	.69	64.65**
いくつか	177	3.41	.86	
全くなかった	117	2.55	.96	
合計	327	3.20	1.04	

\*\*p<.01



### 3) 誤審の有無と「審判員の判定が気になった程度」との関係

「明らかに誤っていると感じた審判員の判定の有無（誤審の有無）」が「試合中に審判員の判定が気になった程度」に与える影響について分散分析を行った結果、 $F(2,324) = 64.65, p = .00 < .01$ となり誤審の有無の主効果が認められた(表10)。

続いて、*HSD*法による多重比較の結果、誤審が

「全くなかった」、「いくつか(1-2回以内)」、「かなりあった」のそれぞれの間有意差が認められた。この結果から、誤審だと感じる機会が増えるほど、選手は試合中に審判員の判定が気になっているということが言える。

以上の「誤審の有無と各質問項目との関係」における結果は、「審判員による誤審の有無が、その試合全体の判定に関する印象(有利・不利、試合

表11 自由記述のまとめ

勝利チームの主な記述
<p>■審判員-選手間のコミュニケーションに関する指摘や要望等</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・話をしっかり聞いてほしい/選手とのコミュニケーションが欠けている</li> <li>・明らかに判定がおかしい時があるので、少し意見を聞いてほしいと思う</li> <li>・今日みたいにファウルをとって話して、説明してくれたら納得できる</li> </ul> <p>■ジャッジの技術的な部分に関する指摘や要望等</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・抗議に対してしっかりとした態度をとっていたのはよかった/もっと試合の流れを考えたポジション取りや判定基準を決めるべきだった</li> <li>・副審が旗をあげている時、もう少しオフサイドを見た方が良い</li> <li>・前半アディショナルタイムの表示が早い(43分)、主審が遠く感じた</li> <li>・プレーオンで流すところと、止めるところの判定が良くなかったと思う</li> <li>・今日の試合はお互いに熱くなっていたので、とってあげるところで取った方が良かった</li> <li>・一生懸命走ってくれていてなるべく近くで見てくれていて助かる。信用できる</li> </ul> <p>■選手自身の心がけ</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・審判は絶対!判定は変わらない</li> <li>・正しくない判定もあったが審判も人間なのであまり文句を言わないようにしたい/審判の判定に文句を言わずリスペクトすることを考えてやっている</li> <li>・審判がいてこそ試合が成立するので文句など言える立場ではない</li> <li>・自分も審判をやってもらっているので明らかなミス以外は審判の判断に従っていきたい</li> <li>・審判を味方にする</li> </ul>
敗戦チームの主な記述
<p>■審判員-選手間のコミュニケーションに関する指摘や要望等</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・選手の気持ちを考えてほしい</li> <li>・しっかり説明してほしい。納得のいくような返答をほしいです/ファールの理由を教えてください</li> </ul> <p>■ジャッジの技術的な部分に関する指摘や要望等</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・近い距離で見してほしい</li> <li>・流してもよい場面でプレーを止めるので、もう少し待つて判断をした方が良いと思う</li> </ul> <p>■選手自身の心がけ</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・審判に文句を言わない/審判に対しての抗議をやめるべき</li> <li>・審判をすることがあるので1つ1つどうなのか考えている。プレーするのと審判をしているのでは全然違うのでとても難しい。</li> </ul> <p>■その他(ジャッジ全般について)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・どっちにしる、自分のチームが不利に感じる</li> <li>・ファールの基準が曖昧、周りの声に影響されている気がした</li> <li>・審判は絶対であり、人間でもある/人間なのでしょうがない</li> <li>・どんな人か考えてやる</li> </ul>

結果との因果関係及び気になる程度)に影響を及ぼす」という当初の研究仮説を、概ね支持する結果であったと言える。

### 3. 自由記述のまとめ

自由記述欄に書かれた主な記述について、チームの勝敗ごとにまとめた(表11)。勝敗にかかわらず、「話をしっかり聞いてほしい」、「選手の気持ちを考えてほしい」、「しっかり説明してほしい」といった“審判員-選手間のコミュニケーション”に関する指摘や要望等があげられていた。加えて、「審判に文句を言わない」、「審判の判定に文句を言わずリスペクトすることを考えてやっている」のような、“選手自身の心がけ”に関する記述も、勝敗にかかわらず見られた。

また、「もっと試合の流れを考えたポジション取りや判定基準を決めるべきだった」、「プレーオンで流すところと、止めるところの判定が良くなかった」といった“判定の技術的な部分”に関する指摘や要望等については、勝利チームから多くあげられていた。

## IV. 考察

考察では、統計的分析の結果で明らかとなった大学生サッカー選手が審判員の判定について持っている印象について、自由記述の内容も用いて総合的・多角的に考察を加えることにする。

### 1. 「勝利チームの方が敗戦チームに比して、審判員の判定を不利だと感じている者が多い」及び「勝利チームの方が敗戦チームに比して、試合中に審判員の判定が気になっている」という結果について

当初、本研究では「勝利チームは敗戦チームに比して、審判員の判定を有利もしくは公平だと感じている」という仮説を立てていた。しかし、結果は本仮説に反し、勝利チームは敗戦チームに比して「不利」だと感じている者が多く、逆に敗戦チームには勝利チームに比して「有利」だと感じていた者が多く、また、審判員の判定を「公平」だと感じている対象者の割合に試合の勝敗による有意な差はない、という結果となった。次に、「敗戦チームは勝利チームに比して、試合中に審判員の判定が気になっている」という仮説については、勝利チームは敗戦チームに比して審判員の判定が気になって

いるという結果となり、これについても当初の仮説に反する結果となった。特に、勝利チームの方が敗戦チームに比して、審判員の判定を不利だと感じている者が多く、また、試合中に審判員の判定も気になっているという結果がどのようなことを意味しているのかについて、考察を行っていく。

まず、勝利チーム(上位チームが多い)に所属している選手の特徴として、選手としての経験値や技量が比較的高く、その分少々生意気で、ずる賢い(サッカー界には“マリーシア”<sup>注3</sup>という言葉もある)ということが考えられる。また、試合の結果や内容に関するこだわりも強いことが予想される。これに対して、審判員は高いレベルでの競技経験を持つ者は少なく、また(審判員を志すくらいであるから)正義感が強く、比較的頑なな人物が多いことが予想される。両者には、こうした経験の差、そして気質や考え方等に違いがあると考えられ、実際に勝利チームの選手たちのコメントには、「実際にやっている選手とのズレ」や「選手の気持ちを考えてほしい」といったものが見られた。つまり、選手は審判員に対して、より選手側に立った理解を求めていると言え、試合中に感じたこのような「ズレ」が、勝利してもなお審判員の判定に関して不満(不利である、気になっている)を訴えた原因の一つではないかと考えられる。

加えて、(審判員が)「威圧的だった」、「おどされた」、といった自由記述もみられた。審判員には試合をコントロールする役割が求められており、さらには彼らも選手や試合自体をしっかりとコントロールしたいと思っており、こうした責任感や(無自覚な)欲望等から、選手に対して高圧的に接する場面があることも考えられる。よって、審判員はこうした傾向を自覚したうえで、選手との間で良好なコミュニケーションを図っていくことが求められていると言えるだろう。そして、こうした双方向のコミュニケーション不足が、審判員の判定に対する不満へとつながっていったのではないかと考えられる。実際、「審判は絶対に熱くなったり、イライラを見せてはいけない。冷静なジャッジ、対応、言葉づかいをしないとイケない」という自由記述もみられた。なお、このコミュニケーションの重要性については、考察4において改めて取り上げることにする。

さらに、勝利チーム(上位チームが多い)の特徴として、審判員の育成にも熱心に取り組むため、下位チームに比して審判資格取得者が多く、審判員としての視点からも判定に関する評価を行っている

ことが考えられる。例えば、「試合づくりが下手」、「主審と副審の連携不足を感じた。実際にそれが原因で誤審が生まれている」、「副審が旗をあげている時、もう少しオフサイドを見た方が良い」、「もっと試合の流れを考えたポジション取りや判定基準を決めるべきだった」といった専門的な視点から、批判的に評価する意見が多数みられた。逆に、「一生懸命走ってくれていてなるべく近くで見えてくれていて助かる。信用できる」といった審判員に対する肯定的な評価も一部にみられた。こうした理由からも、勝利チームは敗戦チームに比して、試合中に審判員の判定が気になっていたのではないかと考えられる。

## 2. 「勝利チームと敗戦チームの間に、審判員の判定と試合結果との因果関係の感じ方について有意な差はない」という結果について

「敗戦チームは勝利チームに比して、審判員の判定と試合結果との因果関係を感じやすい」という仮説については、勝利チームと敗戦チームの間に有意な差は認められず、当初の仮説に反する結果となった。なぜ、このような結果になったのだろうか。

この理由の1つには、「力の差がありすぎた」や「結局6点差で負けたから」といった敗戦チームの自由記述にみられるような、対戦チーム同士のそもそもその実力差や、当該試合の得点差といった条件が影響していると考えられる。本研究の対象となった地域の大学サッカーリーグでは、上位チームと下位チームの実力差が大きく、大量得点差がついてしまう試合があったことが本研究の分析結果にも影響を及ぼした可能性がある。

理由の2つ目に、勝利チームは、勝利を自分たちの実力に原因を帰属した結果であると考えられる。また逆に、敗戦チームには、上述のような実力差に加え、「審判の判定は関係なく力の差があった」や（判定は）「妥当に感じた」といった敗戦チームの自由記述に見られるように、審判員の判定を敗戦の理由にしないというスポーツマンシップに則った潔さがあったのではないかと推察された。

## 3. 「審判員による誤審は、その試合全体の判定に関する印象に影響を及ぼす」という結果について

当初の研究仮説である、「審判員による誤審の

有無が、その試合全体の判定に関する印象（有利・不利、試合結果との因果関係及び気になる程度）に影響を及ぼす」を概ね支持する結果となった。具体的には、第1に、誤審がかなりあったと回答した対象者には「不利であった」と答えた者が多く、誤審が全くなかったと回答した対象者には、「有利であった」もしくは「公平であった」と答えた者が多いことが明らかとなった。第2に、誤審がかなりあった及びいくつ（1-2回以内）における「審判員の判定が試合結果に与えた影響の程度」の平均値は、「全くなかった」の平均値と比較して高いことが認められた。つまり、誤審がないと「審判員の判定が試合結果に与えた影響の程度」も相対的に少ないと捉えていると言える。第3に、誤審だと感じる機会が増えるほど、選手は試合中に審判員の判定が気になっているということが明らかとなった。

審判員は判定に関する誤りを「ゼロにすることは不可能」<sup>2)</sup>であるにもかかわらず、「上手くできて当たり前」<sup>6)</sup>だと思われており、「1つでもミスを犯すと選手、指導者、観客などの非難的」<sup>4)</sup>となる、と述べられている。本研究においても、「審判員の判定が試合結果に与えた影響」が「かなりあった」と回答した勝利チームの選手の中にも、「1個のジャッジミスでピンチになった」、「失点0にこだわってやっているのにオフサイドで失点してしまった」といった自由記述がみられた。こうした自由記述や、本研究における「誤審の有無と各質問項目との関係」に関する一連の結果は、審判員には「誤審ゼロ」が求められていることの顕れと言えるだろう。

## 4. “コミュニケーション”及び“リスペクト”<sup>注4</sup>を通じた、審判員－選手間の関係性の構築

村上らは、ハンドボールやサッカー等のトップレベルを対象とした研究の中で、審判員に必要な心理特性の1つとして「コミュニケーション」をあげ、「選手とのコミュニケーション」及び「選手との信頼関係」の重要性について述べている<sup>13)</sup>。また、榎本・荒井は選手が行う「抗議」を「競技者と審判のコミュニケーション」の一形態であると捉え、選手が審判員に抗議を行う理由を明らかにすることが「より適応的な両者（審判員と選手）の関係性」の検討につながる、という考えのもとにインタビュー調査を行っている<sup>16)</sup>。これらの先行研究からも、審判員と選手間の「コミュニケーション」<sup>13)</sup>や「より適



応的な両者の関係性」<sup>16)</sup>がお互いにとって重要であると考えられていることが分かる。

本研究における対象者の自由記述にも、「今日みたいにファウルをとって話して、説明してくれたら納得できる」、「明らかに判定がおかしい時があるので、少し意見を聞いてほしいと思う」、といった意見がみられた。これは、審判員による誤審の有無以上に、選手にとっては“こちら(選手側)の意見を聞こうとしてくれているのか”、“こちらに歩み寄ってくれたのか”といった、審判員の“姿勢”を重要視しているのではないかと考えられた。

加えて、林らは「審判も問題であろうが、競技における選手の態度も重要な要素」<sup>14)</sup>であると述べている。本研究においても、こうした選手の態度に関する自由記述として、「審判の判定に文句を言わずリスペクトすることを考えてやっている」や、「審判がいてこそ試合が成立するので文句など言える立場ではない」といった審判をリスペクトするような意見、また、「審判は絶対!判定は変わらない」、「正しくない判定もあったが審判も人間なのであまり文句を言わないようにしたい」という自らへの戒めと思われる意見も見られた。

このように、スポーツ競技においては、審判員と選手間の“コミュニケーション”及びお互いが“リスペクト”し合うことを通し、両者が相互に尊重し合う関係性の構築を図っていくことが重要であると考えられる。そして、本研究で取り上げてきた問題を、このように“人間と人間の関係の中で生起しているもの”であると捉えるのであれば、この2点については両者がその関係性の中でより大切に考えていくべきであると考えられる。

## V. 結語

本研究の結果として、1. 勝利チームは敗戦チームに比して、審判員の判定を不利だと感じている者が多く、また、判定を「公平」だと感じている者の割合に試合の勝敗による有意な差はない、2. 勝利チームは敗戦チームに比して、審判員の判定が気になっている、3. 勝利チームと敗戦チーム間には、審判員の判定と試合結果との因果関係の感じ方について有意な差はない、4. 審判員による誤審は、その試合全体の判定に関する印象に影響を及ぼす、等が明らかとなった。

こうした本研究の結果から、大学生サッカー選手、中でも勝利チームの選手は、審判員の判定に

納得しているとは言い難く、よって、審判員は本研究の対象となった大学サッカーリーグにおける選手との関係性の中でも多くのストレスを受けていることが予想される。そして、試合中にたった1つでも選手が誤審と感じる判定があり、それが選手の印象に残るものであれば、当該試合もしくはその審判員の判定全体の評価に影響を及ぼしていると言え、審判員は1つのミスも許されないという状況に置かれていることがあらためて浮き彫りとなったと言えよう。おそらくこうした状況は、本研究の対象となった大学生のサッカーリーグに限ったことではないと考えられる。

サッカー界における審判員を取り巻く環境も、日々めまぐるしく変化していると言える。本研究の執筆中にも、FIFAクラブ・ワールドカップ準決勝の鹿島アントラーズ対アトレティコ・ナシオナル戦において、FIFA主催大会でビデオアシスタントレフェリー(VAR)が初めて導入された。このVARによる歴史的な判定については、世界中のメディアにおいても一斉に報道され、現在も様々な論議がなされているところである。正確な判断が下される、ファウルの抑止力になるといった意見がある一方で、逆に競技の醍醐味が失われる、ビデオ確認が増えることで審判員への不信感につながるといった否定的な意見も少なくない。

このような、まさに「審判受難の時代」<sup>1)</sup>だからこそ、審判員や彼らの判定を対象とした学術的な研究がますます必要となってくるであろうし、またより実践的な価値を持ってくるであろう。今後は本文中でも述べたとおり、研究の次なる段階として、トップレベルの審判員を対象とした面接調査を進めていく計画である。こうした一連の研究を通して、彼らが受けているストレスや置かれた状況を十分に理解し明らかとしたうえで、最終的には審判員の心理的援助につなげていきたいと考えている。

## 付記

本研究は、平成28年度松本大学学術研究助成を受けて実施させていただきました。記して感謝の意を表します。

また、本研究の途中経過の一部は、第43回日本スポーツ心理学会(平成28年11月5日、北星学園大学)にて発表させていただきました。



## 注

- 注1 立谷らによれば、サッカーの審判員に対して具体的な心理サポートを行ったという報告は、世界にもほとんど見られない<sup>8)</sup>という。
- 注2 日本サッカー協会、あるいはその傘下にあるサッカー協会の主催するサッカーやフットサルの試合の審判を務めるためには資格が必要である。審判資格には、1級から4級までがある。日本サッカー協会HPによれば、2016年4月1日現在、254,741名の審判員がおり、JFAが主催するサッカー競技を担当することができる1級審判員は197名、地域サッカー協会が主催する試合を担当することができる2級審判員は3,423名となっており、そのほとんどが、都道府県サッカー協会が主催する試合を担当することができる3級審判員及び都道府県サッカー協会を構成する支部、地区/市区郡町村サッカー協会の参加の団体、連盟等が主催するサッカー競技の試合を担当することができる4級審判員である。詳細については日本サッカー協会HP参照<sup>18)</sup>。
- 注3 下田によると、マリーシアとは辞書によると「ずる賢い」という意味であるが、ブラジルでは「豊富な経験から得た知恵」というニュアンスで使われている<sup>19)</sup>という。
- 注4 日本サッカー協会及びJリーグでは、サッカー界における“リスペクト”の重要性が認識されてきており、2008年度から「リスペクトプロジェクト」を開始している。日本サッカー協会では、リスペクトの本質について、「常に全力を尽くしてプレーすること、そしてそれはフェアプレーの原点である」ととらえている。さらに、「仲間、対戦相手、審判、指導者、用具、施設、保護者、大会関係者、サポーター、競技規則、サッカーというゲームの精神、それらサッカーを取り巻くあらゆるいろいろな関係の中でとらえていきたい」と考えられており、“リスペクト”の精神は日本サッカー協会において、「大切に思うこと」とされている。詳細については日本サッカー協会HP参照<sup>20)</sup>。

## 文献

- 1) 一正孝,「スポーツでの審判について」『国学院大学スポーツ・身体文化研究室紀要』39, pp.17-20(2007).
- 2) 浅見俊雄,「競技判定の科学」『Japan Journal of Sports Science』7,pp.2-3(1988).
- 3) 前田明伸,「レフェリーの動きに関する研究-サッカー-」『東北学院大学論集 一般教育』83-84,pp.182-167(1986).
- 4) 上川徹,「サッカー国際審判員とストレス」『体育の科学』58,pp.389-393(2008).
- 5) 浅野俊和,「スポーツワールド プーリ審判の良心」『世界週報』80,pp.64-64(1999).
- 6) 小川裕司,「審判員にも注目を」『現代スポーツ評論』5,pp.104-108(2001).
- 7) 本間三和子,「シンクロナイズドスイミングは競技スポーツとしてどうあるべきか(特集 審判の科学)-(採点競技-採点の仕組みと問題点)」『バイオメカニクス研究』6,pp.156-165(2002).
- 8) 立谷泰久・堀美和子・菅生貴之・浅見俊雄,「サッカー国際審判員の心理サポート-2002年日韓W杯

- 前を中心に-」『体育の科学』55,pp.327-331(2005)
- 9) 伊藤耕作・伊藤彰・伊藤博,「少年サッカー審判員の判定に関する意識調査」『芝浦工業大学研究報告 人文系編』40,pp.57-62(2006).
- 10) 高野亮,「ハンドボール競技におけるレフェリーに関する研究」『東京女子体育大学紀要』9, pp.65-75(1974).
- 11) 見正秀基,「バレーボール審判員のY-G性格検査結果について」『追手門学院大学文学部紀要』14,pp.341-353(1980).
- 12) 上野康夫・大山良徳・北村幸子,「心拍数からみたスポーツ競技中の監督・審判員の心理的緊張度について」『大阪工業大学紀要 人文社会篇』37,pp.1-15(1992).
- 13) 村上貴聡・平田大輔・佐藤周平,「トップレフェリーに必要な心理特性とは-インタビュー調査からの検討-」『スポーツパフォーマンス研究』8,pp.76-87(2015).
- 14) 林正邦・恩田昌史・清川勝行・三輪守男,「競技の運営法からみたスポーツの比較研究-各競技における選手のルールと審判に対する態度の比較研究-」『体育学研究』12,p.192(1968).
- 15) 小林久幸・林正邦・瀬戸進・竹石義男・奥野直,「サッカーにおける審判とその判定に関する研究-級別による主審の判定距離と動き-」『サッカー医・科学研究』3,pp.36-49(1983).
- 16) 榎本恭介・荒井弘和,「サッカー競技者と審判の関係性の探索的検討-抗議に着目して-」『日本スポーツ心理学会第43回大会研究発表抄録集』,pp.122-123(2016).
- 17) ADRIAN TAYLOR, "Satisfaction among soccer officials", *Motivation, Emotion, Stress, ACADEMIA VERLAG*, pp.197-202(2003).
- 18) 日本サッカー協会, 審判, <http://www.jfa.jp/referee/> (閲覧日2016.12.14).
- 19) 下田哲朗,『サッカー王国ブラジル流 正しいマリーシア』東邦出版(2010).
- 20) 日本サッカー協会, サッカーファミリー, リスペクト, [http://www.jfa.jp/football\\_family/respect/](http://www.jfa.jp/football_family/respect/) (閲覧日2017.2.4).